

すみだ郷土文化資料館蔵『清暉園図記』解題と翻印 ：中村仏庵の文事・その四

ロバート, キャンベル
国文学研究資料館助教授

<https://doi.org/10.15017/9382>

出版情報：語文研究. 86/87, pp.77-89, 1999-06-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

すみだ郷土文化資料館蔵 『清暉園図記』 解題と翻印

——中村仏庵の文事・その四——

ロバート キャンベル

中村仏庵が執筆にかかわった文芸の数々について、その総体の模様を拙稿ではすでに瞥見してきた(註一)。二十代の終わりまでに家督を継ぎ、長男も生まれ、幕府作事奉行支配下の御畳大工として出仕していた。天明六年、三十六歳の折り、幕府情勢で言えば田沼意次の失脚劇の真最中に、仏庵は墨東牛島にあった中村家の別荘を、より厳かなものに新築することを決めた。普請は、それまでに公私を通してつちかかってきた余裕の証し、とも言えるが、直接の動機は一月の江戸大火で神田の本宅を焼失させたこと。度重なる火災に嫌気が差して、いっそう本家を牛島に移すと決心した矢先、田沼の命脈にトドメを刺す例の大雨洪水で今度は別荘が流失。七月のこたで、その直後から隣地を買い取り、災害にめげるどころか、天を嘲笑うかのような大普請をやり遂げた。明くる天明七年新春に竣工。

その頃、仏庵の名は昌平饗の儒学者たちの間では知られて

いたが、家業に専念しなければならぬ年齢でもあり、後のように文人としての名声は得ていない。湯島の昌平饗は、彼にとって作事普請の持ち場の一つにもなったが、それ以前十四歳から正式に儒学を学ぶ学舎でもあり、家業を継いでもなおその人脈を大切にしていた。師事した林祭酒鳳谷先生はすでに亡くなっていたが(安永二年没)、先輩の、それぞれ聖堂と林家塾の啓事を勤めた市河寛齋と平沢旭山とは、ひんばんに会い、親しく交流していた。よく知られるように、二人は寛政の改革に際して退役を強いられたが、その前後の浮沈を、仏庵は間近にながめながら意に介する様子もなく、むしろ旭山のことを、陰に陽に支えていた形跡がある。別荘建設にあたって、旭山と相談しながら建物と外構部分の一つ一つに雅名を付けて、その数十カ所について、全国の儒者、学僧、書家、画家など著名な文人に記念の詩文と書画を募ろうとした。実際の工事と平行して文芸上の構想を二人で練り上げ、

竣工間近の天明六年十二月に、合計八十四人へ向け、作品募集を差し出す準備までした。別荘には中村家の住居の部分とは別に、儒学と仏教の講義がそれぞれ開けるスペースが設計されていて、そこで旭山らは講書を行うつもりだったようである。最後に全体の図面を、友人の画家、その前年に昌平齋へ入ったばかりの鈴木芙蓉に描かせ、その写しか、刷ったものかを方々に配布する予定だったであろう。仏庵の、生涯の文事の基本形となる他者への詩文請求は、この一挙から始まる。

田沼意次は八月に失脚。時代の末尾を飾るべき贅沢な建造物は、このように天災などいくつかの偶然の上に建つようになり、そしてやはり、周辺の目を引く間もなく、ふたたび煙の中へと消えてゆくのであった。天明七年一月十五日、主人の留守の間に火が出て、運び込まれたばかりの私家版『法華經』の板木も、多くの収蔵品も、別荘もともに焼け落ちてしまった。幼なじみで幕府御納戸の御水引屋高岡養拙は、次のように仏庵の禍福を占ってみせた。

聞く所を以てすれば、結構、頗る奢侈に渉る。時に是、白川老侯当路之日也、有司に命じて民間の奢靡を禁じ旧弊を矯せしむ。富商の園宅制を踰へて罪を得る者有り。知らん、仏庵一夕の災ひ、他日の幸に非らざるか(『清暉園図記』題後)。

中村一家はやむなく神田の本宅に帰った。その半月後の二

月一日に、仏庵は旭山に案内されるまま、武州金沢へ遊び、現地の村名主の斡旋で金沢八景の一つ野島山中の土地を購入した。一年かけて、二度目の別荘を建てるためだというが、実際に建築が進められていたかは定かではない。道中の様子を、旭山は『漫遊文章』巻五に詳しく綴った。牛島別荘の火事にふれて、仏庵の達観した姿を描き、そして自分の役割にも言及する。

一時風烈、家人は烟を避けて走る。書籍什物、一空地を掃く。余、すでに諸聯語額字を撰び、堂室の諸記を作る。亦かつ思ひを園の記に構へ、弁山園をして美を千古に擅びじままにせしめざらんと欲す：

書いたが無駄になった旭山の聯や記、八十数人に向けたという詩文募集などは、彼の没後に中村家で保管されていたらしく、その全体を、晩年の天保四年に仏庵は整理し、卷子本一軸にまとめたのがここで紹介する『清暉園図記』である。仏庵自筆の箱書きと外題、題字のほかに平沢旭山・高岡養拙・荻野梅塙(幕臣)の、それぞれの筆にかかる稿本を張り合わせたものである。紙本で縦二五・四横×巾一九二・五糎、鈴木芙蓉の図画(図一)は落款がなく、真筆かどうかは未詳である。一巻の成立と解釈の詳細については、後稿を待つとして、ここでは差し当たり『図記』を白文のまま翻印することとしたい。漢字は現行の常用漢字又は正字を用い、読点を原文のままとした。判読できなかった文字は「□」とした。

【付記】「清暉園図記」の翻印と図版掲載を許可して下さったすみだ郷土文化資料館に深謝を表したい（整理題名は「向島中村仏庵別荘図巻」）。本資料は、以前墨田区立緑図書館に所蔵されていた頃、上野寛永寺の浦井正明氏のご教示によって存在を知った。未筆ながら感謝申し上げる次第である。

註一・「中村仏庵の文事（一）」―柳原邸の文物集散と交遊―（平成五年・汲古書院『和漢比較文学叢書』十七）。「中村仏庵の文事（二）」―職人家歴の辞藻―（平成四年十二月・『語文研究』七十四号）。「吉原考証の雅と俗」―中村仏庵の文事（三）―（平成六年二月・雅俗会編『雅俗』創刊号）。

清暉園図記

◎箱書き

「牛島別荘／清暉園巻軸 中村氏蔵 朱文円印「仏庵」

◎外題

「清暉園図記 旭山著芙蓉画（印）」

◎見返し

朱文方印「中村入道仏庵」。白文方印「江戸中邨蓮字景蓮号 至観鑑蔵曝書印」。

◎題字

関防白文方印「老蓮」

焚余崑壁

文政甲申初夏題于小梅邨瘦竹精舎七十三翁仏庵蓮（白文方印「仏庵」「云介」）

◎題詞

関防朱文方印「楽道安客」

別業嘗為一炬煙悠悠在四十年前風流築向画図見光彩生依文字
伝烏有方知是殘夢人云何忍読遺篇老翁懷旧頻催淚鬼録題名紙
上連

文政甲申仲夏

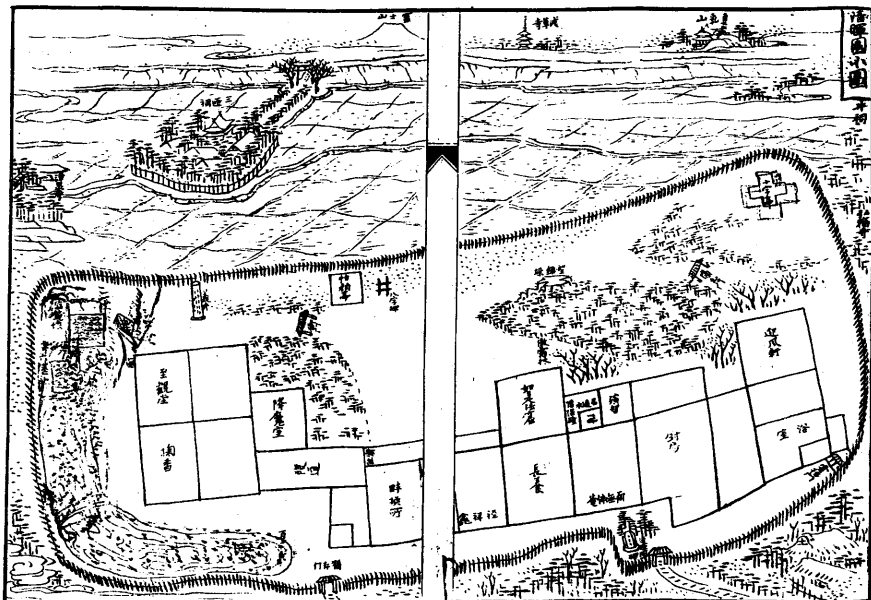
七十二翁高岡秀成題于養拙齋中（白文方印「高岡秀成」）。

朱文方印「実甫□」

◎鈴木芙蓉作清暉園小図（図版一）

◎本文

乞銘記題咏文（註・野箋一枚目版心に「南無仏庵蔵」と墨書）
先人厚信瞿曇氏之教、不佞連、幼而慣聞、没後遂太好其道焉、
嘗修先子追福、而家刻法華經文句、而施与同志縑素、刻成而
得唐造釈尊銅像矣、感得之所由来、業、已作記模像以広焉、
於是思欲宮一小精舎、以安置之、今春、家宅離祝融之災、急
遽奉像提家、移居川東牛島別墅、已而洪水襲隆、園亭沈没咸
破壊、属者修理之次、新買隣地、闢園那石、經始小庵、名曰
南無仏庵、其楼為香室、而誦誦貝典於下軒、名曰如是法窟、
右有迎風軒、接賓之舎、左曰畔換所、是不佞游息之所、畔換、
猶曰偃蹇、乃取之唐詩句矣、通以複道教弓、漸入至観堂、々
本在宅側、今冒其名於此、有記、鳳谷林祭酒之撰也、大抵仍



圖一

旧修之、屈曲連簷、或依卑濕成趣、庭際瓠落而淺、因植松樹
 数百株、名曰傲霜林、々中有小丘、不甚高、登之西南与富士
 山相对、白雪皚然于四時、与我園映带、名曰望縹埃、北行十
 字亭、南則怡顏亭、十字亭、四出作屋、每屋有名号、益南
 有数畝茶圃、名曰密雲、茶室在堂後、碧石而設榻、不用蘭席、
 上方安陸鴻漸像、茶制与用具、一依茶経、名其室、曰降魔、
 自余幕門必有遍、圭竇亦挂聯、必有之物、尽援名字、小碑以
 表焉、需諸名流詩詞銘記而文之、唯至觀堂、存原記、南無仏
 庵、不文自記、方宮未成者、為十字亭、為義井、義井制、亦
 極奇、其大不異常井、其筒以黄銅造之、出地十許尺、如銅柱、
 又如華表、有蓋覆之上、若復有囊隆之麥、輒塞下口以螺旋、
 有人求清水、則舟而來、徹其蓋而吊焉、日前之厄、遠近之飲、
 余亦不飲三数日、苦甚、時心誓、必造義井焉、故有此举、其
 銘記、已有所托、園之記、亦待全成而請之、其他則隨成而需
 之、諸君幸不嫌鄙陋、辱賜一言、豈唯一木一草之榮乎、光輝
 之生、寔在斯文、亦惟何陋之有、謹開似所定名号於左、而敬
 乞、若夫觀之所及、北隣弘福牛祠、南近三匝淨泉、隅水一带、
 過此紅亭青樓、相接于乳山之麓、騷客游人、輻湊于春時、而
 長堤之上、白馬金鞍、非相駟逐、則錦袂綉裙、相連作帷、舟
 楫銜尾、而聚於堤下、絃歌日夜而誦、一轉、則施無畏之教塔、
 兀然于莽叢之間、花川渡長橋、起虹於雲烟、之中者、亦皆入
 庭際為我清暉園之有、是亦將助作者之文思云、

天明丙午臘末

清暉園主人中邨連景連 撰

園亭名号

清暉園 總名曰清暉園、刻三大字於石、而立於外門內、

南無仏庵 四大字遍、顏于戸内、而左右對聯一副、其内挂在

園記、楼上為香室、柴壇龕安尊像、左右挂金聯、別小龕、

奉觀音大士、有小聯、室外一間、為誦誦礼拜之所、影庵記

於其柱、而遍上方曰抱虚、穿階之左壁、設盤供盃嗽、名曰

居遲水、取于梵制也、其側小隙、置自鳴鐘、名曰借陰鐘、

若庵中所藏、除法華鑲板外、法具什物数件別有記、

如是法窟 此是余不佞讀書之齋、滿壁画群像、淨几筆研外、

無長物、其所以命名者、窃体如夕即是、因自讀曰法窟耳、

記若說、敢煩大手筆、成則刻以挂壁、將千載我旦夕、其次

曰演智、按抛仏法、以二分學内典、一分誦外典、不佞雖不

能如法、已称法窟、姑取抵垣例、設重架以蓄五經四子雜籍、

而待明慧者、又其次曰長養、席間設地炉、備伊蒲之供、皆

有遍、

迎風軒 接賓之舍也、遍在齋頭、入外門至此、庵前右折而行、

小徑有関、常不闌、名曰雲招、入関左旋、輒出軒之牖前、

竹木花卉、別有趣、此亦不可無記、敢煩、軒前將入松林、

又有小関、名曰隔凡、又林間旁通小逕、其衝門曰湿翠、有

井故也、

畔換所 已是箕居盤桓之地、其記不敢乞、設得之一時戲作、

為出望外已、次隔一間、置家先牌子、其顏曰祗祥、乃先子

所命、不敢改也、複道從此而通、挂漸佳二字、前庭怡顏亭

与此相對、亭僅数笏、不足容客座、唯挂小遍、

降魔室 已具于前、但是足可作記、敢乞、

至觀堂 其遍与記、俱用旧物、次一間、名掬香、義取于朋友

薰陶之意也、連嘗窃以寡議有力之同志而買城外一間地、以

關園、々中造書院、而蓄四部之書於尊經閣、請一老宿擬教

授、結社以講業、又宮一精舍、置藏經於其側、請一知識為

導師、集仏子以修十二部之學焉、唯是塵勞多事、宿志久不

遂、今焉依蒼理別墅、寓微意於此、仍延所善一義龍於南無

仏庵、將自開貝多講論焉、至觀堂姑擬之書院、將會業經伝、

并誦因書焉、是連之心事、詎与諸君、然亦修園亭之本志、

且將有所請、故遂及于此爾、

望縹塚 刻小碑立之塚上、已下俱小碑、

傲霜林 立隔凡門内、

八字碑 刻水辺維葛、一八四八八字、立書齋前井側、

種福田 立水田側、

密雲圃 入圃之口、用竹作泉門、置此於門左、

六湛池 立圃中盆地側、語取楞嚴句、

臨鏡堆 池側一堆、地凸而無所望、但臨盆地、故名、碑立堆

上、

独笑橋 園之東南隅、有独木橋、自猶存門入密雲圃、則過此

橋、門即旧墅之口、在堂東北、字取陶公辭句、而転其意、

橋之為笑、亦不必待遠法師也、碑則立橋北、

百成圃 密雲圃之東、為菜蔬之圃、名曰百成、存囑得而可成

事之警、亦有碑、他未命名号者、非此限、詩詞若銘記、或刻小碑之陰、又集而成帖以上石乎、則不唯不佞榮寵、亦是非不朽一小盛乎、謹乞、已所成諸銘記、隨得而錄于左、

銅造牟尼記

中邨連景運

世尊銅像一軀、踞臥牛之背、左掌安一小輪扁袒右肩、而結說法印矣、吾聞之、此是法華白牛車軛法輪之像也、先是、余刻法華經文句、時又買得龕厨一副、堅緻精巧、彩画以蓮華雜卉、溫雅古奧、漆成龜文、示之漆工、皆云、漆非國產、要是數百年前物也、余愛玩之、已而得尊像、試安之厨子、不寬不狹、宛然似待之者、初也詔然喜、終則竦然以起敬、乃捻香而禮拜、謹而審睹之、神相圓滿、物形逼真、紫色沢潤、模造之精、不可議也、背面款唐武德年性本造七字、々体亦古拙、莫可疑者、彼武德元年、當推古天皇二十六年矣、此時仏法盛行、像經多歸于我土、可知也、但性本、不知何人、高僧諸伝無所見已、余得尊像時、所刻文句、適至第五卷、其所說、乃軛法輪妙法也、其復何奇、連謹按、隋開皇十七年、天台大師寂、灌頂尊者記文句、顧徑數年而成、武德距開皇、大約二十許年矣、然則尊像之成、正当尊者修記時、亦未可知也、厨子待尊像、而文句亦竣功、是其靈応不可思議、何得謂奇乎、景仰之余、為倩友人福隆慶、恭模像影、并背面七字、彫梓以施四方信者、尺度一如尊像也、又按推古天皇二十六年、距今一千一百六十八年矣、未嘗被水火之厄、儼然見于今日、誰堪至感乎、伏冀四方僧俗、乃至

一切衆生依此靈驗、俱証得菩提焉、是乃連之至願也、于時日本天明六年、丙午、四月仏生日、薰沐謹撰

南無仏庵記

前入

余之刻法華文句、適得唐造牟尼尊銅像、感得之由、已叙其事於文句簡端、又作記以広之、於是、思欲宮一小精舍、以安置焉、今茲孟春、都下舞馬之厄、家宅延燒、乃寓居城北牛島別荘、孟秋、竈蛙之變、牛島諸邨之民、僅免魚腹、園亭亦破壞、屬者修葺之次、新買其隣、而闢我園、第屋小樓、柴壇苟全、謹奉尊像、以為修福之地、延僧落之、因命曰南無仏庵、二六時中、一唱三札於茲、持呪誦誦於茲、畢則徐步于庭際以游觀、大凡花卉竹樹、轟々頑石、亦皆聞法點頭、遠之万古雪壁、皚然于雲表、是我大東之鎮也、其為皇子王孫、武相諸山、一時微笑、觀喜、一是皆諸法実相、悉皆成仏去已、何況南無仏庵中人乎、是余之所以命名之意也、因藏文句鏤板於庵中、擬待信心学仏者、施与印本焉、若夫付囑以尊像与庵地、則他日待其人云、天明丙午、十一月二十八日、戊戌

至觀堂記 國子祭酒林信言子恭父

中邨連所居、曰至觀堂、謁余曰、凡人之欲有所游者、有所欲觀也、大而城邑山川丘陵、小而草木鳥獸虫魚、去我所不足与常所厭、就彼所有余与所未經、而後獲憐于心也、然獲者常少、不獲者常多、求備于物也、今某之堂、举目未觀明媚之秀、傾耳未聞林泉之響、羣埃之不及避、燥湿之不及禦、

而日則細帙之卷、昼則烏几筆、夜則灯前之吟、終日終年、未嘗倦怠、所欲游、恍惚形于後、所欲觀、髣髴見于前、不復勞軀役神、求諸舟車之鄉、而獲者常多、不獲者常少、是取足於身也、是堂之所以為名、願先生記焉、余曰、至哉觀也、昔者壺丘之望于列子、莫以尚焉、豈俟余之言、記此乃足已、書其語以為与也、安永改元、壬辰十一月、冬至日、如是法窟說 沢元愷弟侯

景連自名書齋曰如是法窟、謁余作之說、蓋景連所好者、釈氏之道也、其取名、亦拋其所道而足矣、何復談余之言焉、已謁之余、其意可知也、余亦何讓、夫釈氏之於我、為夷狄之道、夷狄之道、直情而徑行者也、景連而好之何居、蓋善之立于民者、命以法、々之歸于理而活動者為道、是以其為道、無顯無晦、無生無死、周流而常存、々養其常者而不失、是謂之如是、景連自謂、夷狄之有道、不如諸夏之無也、日夜居如是而不疑、経伝子史、百家禪說、莫誑而非其法者、孝弟忠信、礼義廉恥、莫行而非其法者、是謂之法窟、已是無顯無晦、無生無死、歸于理而活動、非我直吾情、徑行之善、豈是尋常之行乎、景連嘗受業於林祭酒鳳谷先生、而游息於學院、豈不知釈氏之為夷道乎、亦何不知直情徑行不足拋乎、故景連之好釈氏之道、其諸異乎全好之者歟、其謁于余而不指、亦以此而已、余不佞非以皮相取交於景連、猶何遜言、是乃亦莫非景連如是窟中之物已、若謂外此物而有說乎、則非余所知也、

南無仏庵聯

種樹多蔭石上莓苔一莖不染
蒔花結果林中鳥雀別籟妙音

又

深林結榻塵跡頓座花影如避客但看盡根漸露
此裡翻書凡音俱遠風声來攪人偏覺妙相自呈

釈迦齋

金輪転処真如妙法說得渾無跡
宝筏載來神相莊嚴拜戴信有光

如是窟 廂外

微雲千里淡沫雪壁点染不礙太清
好雨一時輕洗翠幔扨拭困其本色

惜陰鐘銘 為□□韓

陶公惜分况是電光石火
且莫千載况是永劫在我

八字碑

水辺維島一八四八

雲板門聯

伴雨前村迎客触石徘徊 改作
逐風小逕送人傍花点綴

一蓮形石盤銘 圻斯触

柔為堅

一降魔室

入口ノ聯 額 内ノ左右聯

陸羽像贊 内ノ額古銘

一衽祥龕聯 祖先祠堂

一復道の行当りの額聯

一雲板門聯

前村伴雨送人時触石徘徊
小逕隨風迎客或傍花点綴

一心經碑

一木刀の銘 不殺為宗我家阿龍

一如是窟說の大きさ巾六寸長四尺余

一降魔室内面扉字 或是古語

隔凡門 凡聖非二 境界詎隔

渙然融化 焉有主落

觀音龕聯 耳觀至処花光此粉色非色

眼聽開時露滴水流声外声

降魔室

月下攤書先覺睡魔已避□□
花旦辰□榻俱言歡伯亭輪一籌

○清暉園名号銘記聯額

清暉園總記

碑字 蘇公集字

南無仏庵額 主人景連書

聯 弟侯代作

記 弟侯代作

如是窟額

聯 弟侯作

說 弟侯作

至觀堂額 李公集字

聯

記 林祭酒旧作

迎風軒額

聯

記

降魔室額 内外二对

聯 内外二对 弟侯作

記

畔換所額

聯

說

衽祥龕額

雲招門額 米南宮集字

聯 弟侯作

隔凡門額

聯

湿翠門額

猶存門額
十字亭
怡顏亭額

聯

義井銘 弟侯作

借陰鐘銘 弟侯作

八字碑 弟侯作

釈迦龕聯 弟侯作

觀音龕聯 弟侯作

小額

長養

演智

掬香

漸佳

挹虛

居遲水

小碑

傲霜林

望縵塚

密雲圃

百成圃

六湛池

臨鏡堆

独笑橋
種福田

右乞銘記題咏文 弟侯代作

○清暉園題咏銘記可頼人名

江戸儒者

林家學頭 関永一郎

同 市河小左衛門

堀田侯臣 波井兵左衛門

尾州 海井之親 駒井勘三郎

備前 井上仲

千葉茂右衛門

古屋重多郎

芙蓉取次 山本喜六北山

入江幸八

岡井郡大夫

伊藤金藏藍田

嶽金左衛門

安達文中

村山新右衛門□□□

後部新藏

佐々木坦藏

角田彦一

青山侯臣

筑前

あき

井上水蔵

新山健蔵

平井直蔵

結城只助

雲気

森彦右衛門

山田文助

佐々木帯刀

杉浦徳蔵

滄浪山人

尾崎周平

頼弥太郎

安原三吾

戸倉作助

大久保五郎兵衛

脇□右衛門

望斎マツ

龜田文左衛門

辻珍蔵

佐久間栄治

河内宇八郎

東本願

平士

山形侯臣

酒井侯臣

僧

藤谷嘉一兵衛

鴻漸房

浄立寺詮然

明静院

玄竜院

惠恩院六如

相国寺大典

千界山百如

僧聞中

片山中蔵

中井善太

柴野彦助

皆川文蔵

江村伝左衛門

龍元二郎

江戸書家

平林淳信

沢田文二郎東江

屋代与左衛門 深河辺 物頭

関源蔵

佐野忠二郎東洲

与力

京

大坂儒生

京

近江

同

京都

上野

上野

沢安院北沢弥左衛門大恩寺前

芝田清八郎文令

前田経七郎

神村元二郎善長

須藤官蔵

植田文蔵

松本弥門牛山

鳳山

赤峰

松井甚三郎

花谿

江戸画家 唐画

松林儼

鈴木新兵衛芙蓉

諸葛監

辺英辺部文蔵

宋紫石雲溪

旭江

江雲

梅里

司馬江漢

梅溪

北川権之助

与力

御小姓

井戸小十郎衛董九如

綉文橋

弗質并華唯希錦其腸綉其口

匪危匪絲独願峻所行文爾言

雲招門

伴雨前村迎客触石徘徊

遂風小逕送人傍花点綴

芦荻明暗風揺数重之翠幔如斯佳境祇許鷗鷺相窺
波浪影浮月吐幾点之華綻此際幽懷唯懼狩獵來攪

幾分幽趣全憑孤幃疎柳按排

一陣香風總是紅蓼白蘋粧点

竹榻忙下空知綉日錦腸之客 弟侯

柴門時開寧為華表珠雁之人 休文

冤家 就ズハチレ是(註・朱筆)

非欽仏縁居下必発羅池 蓮池書屋聯

似慕陶趣池隣也那岐町

戊申年

非画則文

無詩則字

木刀の銘 弗殺爲宗我家阿龍
五明橋聯銘 嬾々雌風揺滿過橋上

團々酉月遊來綺峯間

いさゝめにはたれふりけり春鳥の

羽風うちかふ花と見るまで

千蔭（註・朱筆）

密廬 爾雅其本密

瑟鉢羅園

羅你 池也

娑羅囊 池也

（白文方印「沢元愷印」、「弟侯」）

題後

（白文方印「養拙齋」）

予之於仏庵從重禪相親當其壯歲開別業於川東牛島也時々相伴遊又留宿共風月之賞時或煙花情動呼舟爲北里之遊既而予蓄妻子塵務日多不得逸游如前日較致疎闊仏庵居宅在予隣街天明丙午同罹災仏庵登時移家人於別墅既而厭都下多災不復營於旧址議以別業爲居宅愁地隘便買隣園而益之凡若干頃新作宮構予則在市井余燼中依旧作屋就職事塵務滋多又值二親亡服喪相繼加以其室遠履跡不蹈其庭者過一期矣適仏庵來接其話知宮造既成復聞儒生平沢弟侯者近日占居于隣里與議宮構築一書院蓄儒書又營一精舍藏仏典將與同志結社講内外二教弟侯善文辞堂舍門

庭悉挾嘉名將假其手筆文之予曰如子所言則盛事也不知治產之余力果能成之乎時予與弟侯未相識也窃謂雖非謀之不臧講學既非其地且過分之事恐難繼也仏庵曰土木功竣近日將落成請子亦臨焉予曰諾既而聞一夜忽失火遇風烈炎々非可撲滅新造屋舍倏忽成煨燼所刻法華文句板及許多什物皆掃地而空多日蓄念一時灰燼付之一大息耳嗚乎其初開別墅也予常過訪其遊息焉其成壯觀也未及一寓目忽焉爲烏有造物又何意使予取快于始而失望于終耶豈天或有意于害盈而使其差跌自省耶蓋仏庵宮造之意雖託言於風雅本非分内之事且以所聞結構頗涉于奢侈時是白川老侯当路之日也命有司禁民間奢靡矯旧弊有富商園宅險制得罪者焉知仏庵一夕之災非佗日之幸乎昔者柳々州有賀人失火文雖非人情非無其理也塞馬之亡馬非禍坡老嘗言之天意憤々禍福互爲本根豈凡慮所能及哉於是仏庵復起宮構于旧地爲予隣如故事在于天明丁未年矣頃者仏庵搜篋中得爾時木文熙所作清暉園新造屋構圖及弟侯所撰堂舍門庭嘉名諸聯記雜文稿本其中唐造牟尼仏南無仏庵二記乞言四方名流文所代主人作也奉爲一卷携來示予且曰識認当年事者在今日則足下一人耳願煩一言予展而覽之燦然文采貫于丘園宮構雖具滿地生光全在于弟侯筆也弟侯嘗云構思于清暉園記將使穿山園不專美于千古非虛語也惜乎皮之不存毛無所付竟不睹園記成也弟侯後年卜居于予望隣日夜相得而親其人峭直又長于作文胸懷所欲言吐勿々走筆不輟當時與新築議遽々情態可想耳園中所起堂舍則南無仏庵如是法窟長養軒畔換所至觀堂掬香軒降魔室禳祥龕迎風軒亭則十字怡顏又園中所有

則望渺塚傲霜林種福田密雲圃八字井六湛池臨鏡堆独笑橋雲招
門処々立小石勒名号園外則三匝牛祠平田相連弘福禪林鐘声相
聞園中所望遠則富岳白雪巖然于中天近則真乳幽翠淺草堂塔陰
映于日輝皆為庭中物富有哉仏庵壯年志氣剛勇于敢為起壯大之
築設使在于衰日必不及之矣如不佞成終身役々屈而不伸胸中丘
壑徒置之詩句間無一事可对人言孱弱可笑矣夫勢家園地奄為他
人有驕奢子弟一旦家衰不保田宅常為人懷惻矣仏庵經營如此乍
為祝融氏崇瞬息不及便決意遂壳与其地于人無復分毫遺念雖成
事不遂亦何捷快也其剛斷可知矣屈指天明丁未距今殆四十年举
其事者弟侯文熙墓木既供又無子孫爾時擬乞詞筆四方韻士紙上
署五十余名檢之無有一人存悉為鬼錄幸而存在則仏庵与予二人
耳予对此卷不覺悽然垂淚因思人世駒隙流年之駛四十年如一枕
夢与夫別墅一夕為焦土又何折焉復思予与仏庵既過古希齡不擊
缶而歌則大叢之嗟今日話往事起嘆安知不明日為人所嘆息如今
日二人話昔時也夫別墅宮構許多光景為祝融氏所奪去為一夕夢
者在于四十年前之前焚蕩之余崑壁碎片纔存恍惚竟弟侯文熙如在
于目前者在于四十年之後謂之夢中說夢亦可矣四十年前在于家
兒輩未生之時今抵掌話往事家人傍聽不解其話無乃以我不為痴
人說夢乎亦唯不朽者文今日使二人生悽惻念者豈非由于遺筆存
乎竟題痴言于卷尾

文政七年甲申仲夏友人高岡秀成書于養拙齋（白文方印「高岡
秀成」、「実甫□」）

五百年間天必出奇于宇宙荒古來今綿々不絕矣其為奇也於絳芸
於勇略於道術於百末技無有準則彼々於某是々於某豈違屈指于
此際哉如我仏老先生者蓋亦天出奇之一者而已矣於此園記于名
狀于奇賞于景勝于地理當時鉅公述之同好名縉頌之園已屬內童
泉石總輪輸烏有之鄉儼然大筆赫爾雅韻宛如眼前抑亦金谷輞川
今將那処焉老先生爾後優游自娛於道益增進耳順致仕剝染珍老
人自制戒于遍吉像前骨壺蕭然寓居小梅邸宴坐龜井墅為小楨也
為龜墅也室無長物家無贅產更擬嗣君碧海公徒守別邸之役夫耳
環堵寂々朝昏將此園記以充龜墅結構且擬臥遊乃戲言云清暉於
老夫固幻構龜墅於似留守役夫亦得謂非幻戲乎天翁其以老夫授
奇幻之名号乎聞此戲言亦復幻聽記者幻人云爾天保四年癸巳重
陽後三于時秋霖忽霄天色清暉任眷愛囑同郡散客楳塙野長記于
龜井中邸氏別邸（白文方印「蘇長之印」。朱文方印「梅塙居士」）